

9	主題：その人らしい「生活」の続け方			
	副題：視床出血の方の支援を通じて気づいた過ごし方			
部 門 : <input checked="" type="checkbox"/> 施設 <input type="checkbox"/> 在宅 <input type="checkbox"/> 地域包括ケア <input type="checkbox"/> 市民活動				
事業所種別・名称		高齢者福祉施設		
発表者：寒川 大佑		アドバイザー：藤島 大三		
共同者：鯉沼 直				
電 話：042-734-0631		e-mail：d. samukawa@fukuinkai.or.jp		
FAX：042-734-0638		URL：		
今回の発表の事業所 やサービスの紹介		東京都町田市野津田町 1932 社会福祉法人福音会 特別養護老人ホーム福音の家		

<p>《1. 研究前の状況と課題》 入所後より、夜間帯の浅眠とおむついじりがあり、職員間でも対応について検討を重ねてきた。それぞれの介護観があり、話し合いは行うもののチームでのアプローチが難しい状況であった。そこで、多職種を交え「その人らしさ」を追求し、再度、ケアについて見直しを行った。</p> <p>《2. 研究の目標と期待する成果・目的》 視床出血の後遺症に気を付けながら、本人が望む過ごし方を尊重するケアの仕方を行う。それにより、職員が本人自身を理解し、本人の意欲・生活の質の向上が図れることを目的とする。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》 対象者：80代男性で入所後約1年が経過。要介護5でリクライニング車椅子を使用。日常生活自立度C 認知症高齢者自立度IV 具体的方法：①生活機能評価時に理学療法士に相談し、M様の身体状況を見て連携を行う②排泄の時間帯調査を行い、排泄リズムの把握を行う③接触回数を増やして日常コミュニケーション機会の確保④日中での傾眠傾向の把握を行い、医療との連携を図り、夜間帯において質の高い睡眠の確保を行う⑤上記についてこまめに記録をとり、フロアノートで共有を行う。 期間：R5年12月～R6年8月 関わった職員：介護職員17名、リハビリ職員、看護師 ポイントとなった点：職員が同じ方向を見て支援をするようになり、少しずつ、うめき声を発する回数が少なくなりご家族との交流がスムーズに出来るなど成果がみられた点。</p>	<p>《4. 取り組みの結果と考察》 1. 日中や夜間帯を通して、大きなうめき声を発せられる回数が少なくなり、表情が柔らかくなり、活気が見られるようになった。 2. ベッド上と車いす上での過ごして頂く時間帯を見直したことにより、車いす上での右への傾きが少なくなった。食事をご自分で食べられる量が増えていった。 3. コミュニケーションや本人の生活を細目に観察することにより、声出しの意味を把握することが出来るようになった。意識障害があったとしても、職員や家族とのコミュニケーションがとれることがわかった。</p> <p>《5. まとめ、結論》 今回の取組から、視床出血についてケアの工夫だけではなく、医学的見解を交えながらアプローチすることで日常生活の障害を改善できることが理解できた。その中で、M様の意識向上、廃用症候群の予防に繋がられた。他職種と連携したことで、介護職以外の目線も加わり色々な視点から、本人へのケアの質向上への解決策を探ることが出来、改めて連携の大切さを実感した。本事例を機会に他の利用者への気づきを発信する職員が増えた。日頃のケアの疑問も、新たなケアの始まりとして取り組んでいきたい。</p> <p>《6. 倫理的配慮に関する事項》 なお、本研究を行うにあたり、本人（家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることがないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。</p>
---	---